



雨の日に私は私に会う

雨の日に私は私に会う

会社からの帰宅途中、春の嵐にあった。もう少し駅で待てばよかった。いつも私はこうなのだ。後悔先に立たず。一生懸命自転車をこぐ。雨も激しくなった。雨宿りする場所を探して住宅団地に入った。適当なところが見つからない。ふっ、今の住宅は廂がないんだなあ。あっても門柱の中か。私の家もそうだった。また、光った。私の周りが浮き上がるように明るくなる。一瞬、廂のある家が、稲妻の青みがかった光りの中に影絵のように浮かび上がった。ものすごい雷鳴。廂に駆け込んだが、雨風は殆ど防げない。ぼんやりと、山村と書かれた表札を眺めた。やっぱり中央突破しかない。びしょ濡れ覚悟で、自転車を走らせるしかない。北の空は雷さんのオンパレードだ。自分の立場を忘れて、きれいだと思った。フランクリンはこんな夜に凧を揚げたのだろう。

思い直して、自転車に乗ろうとした時、窓硝子が小さく開いた。

「そこじゃ、どうしようもないわ。お入りなさい」

四十過ぎの女の人が、私を手招いた。

タオルでコートを拭い終わると、女の人と言った。

「コートを脱いで」

「あ、ありがとうございます」

私は渡されたタオルで顔を拭いた。

母も、雨に濡れた私をいつもこんな風に迎えてくれる。

「私のだけど合うかしら」

女の方はズボンを片手に現れた。

「お風呂場で着替えてらっしゃい」

着替えるとピッタリだった。

「何処かでお会いしたことがあったかしら？」

外から声がした。

「いいえ」と返事をしたが、私もそんな気がしていた。

「お茶を入れるわ」

「ありがとうございます」

女の方の好意をすんなりと受け入れている自分が不思議だった。

熱いお茶は気持ちを落ち着かせた。

「おばさん、ありがとうございます」

「おばさんね。四十路も半ばだから」

「えっと」

「いいのよ、おばさんだから。でも、洋子と呼んで」

「私とおんなじ」

「太平洋の洋」

「ええ、新井洋子です」

「驚いた、私の旧姓ね。新しいと井戸の井」

「そうです」

顔もよく似ていた。私の20年後。彼女も同じことを考えているようだ。

「私は洋子ちゃんというわ」

「そうですね。私は洋子さんと呼びます」

「自転車で通勤？ 。通学かな」

「通勤です。毎日20分も自転車に乗るんです」

「私も若い頃はそうだった。健康と美容のため？」

「ええ、あんまり効果はないんですけど」

二人は顔を見合わせて笑った。

「洋子さんは主婦ですよ。長居したらご迷惑だから」

「いいの、全然。ケーキでも食べようか。ずいぶん前から、洋子ちゃんのことを知っているような気がする」

「不思議ですね。私もそうです」

コーヒーとケーキをいただいて帰った。ズボンは後日返しに来ることとして、濡れたコートは持って帰った。外に出ると嵐はすっかりおさまっていた。星空を見ながら、自転車を押して帰った。自転車に乗ってさっさと帰ってしまうのがもったいない夜だった。

次の日曜日、お菓子をもって訪ねたが、違う表札がかかっていた。念のために呼び鈴を押したが、出てきた主婦は洋子さんと全く違っていった。

「前に住んでいた人？ ここに私は10年以上も住んでいますよ」

怪訝そうな表情を浮かべて彼女は言った。団地の住宅案内図にも名前はなかった。私は山村という人と結婚するのだろうか。私の周りには山村という名の人はいない。これから現れるのだろうか。雷雨の中、時間のはざまに落ちたのだろうか。私は頭を振った。単純に住宅団地を間違えたのだ。嵐の夜、私はおかしくなっていたのだ。それが正解。自転車をこぎながら、また、考えた。

私は洋子さんに何も聞かなかった。どんな人と結婚しているのか？ 子供がいるのか？ 後から考えればとても不思議だった。

やはり、20年後の私に会ったのだ。いつの間にか、借りたズボンも消えていた。

了